

死にそうな
転生したら
孤鬼でした
5回目の人生、

2

Kou Sasaki
佐々木 鴻

III. でかるこ

???

*
レンテが保護する魔族の青年。
どうやら王族の血を
引くようだが……？

レンテ

クリスタ・マイン

*
迷宮『結晶鋼道』を
支配する魔族。
気弱だが、芯が強い。

デシレア

*
神域に棲む植物妖精。
神話の時代を知るとい、
ミステリアスな美女。

ヴァレリー

*
ファルギエール侯爵家の令息。
『不滅の魔王』の生まれ変わりであり、
戦闘力はバケモノ級。

シュルヴェステル

*
辺境の街・ストラスクライドの
冒険者ギルドマスター。
厳つい見た目に似合わず、
面倒見がいい。

ナディ

*
本作の主人公。転生を繰り返した末、
貧民街の孤児としての人生を与えられた。
四度の転生で手にした力を駆使し、
自由気ままに暮らしている。

レオノール

*
生まれたばかりの頃、母とともに
刺客に襲われていたところを
ナディに救われた少女。
今はナディの妹分。

Characters

一章 草原に戸惑う

階層型ダンジョンにおいて、階層ごとにまったく別の景観が広がる事例は、珍しいことではない。だが、それはあくまでもそのダンジョンに関連した景色——たとえば迷路のような洞窟から地下大空洞になる、地底湖になる、といった変化だ。

間違っても、まったく関連のない場所に出ることはありえない。

今、ナデイの目の前に広がる光景はその常識から逸脱していた。

地下坑道を進み、四十三階層に続くはずの階層門を抜けた先。

そこは晴れ渡った蒼穹が広がり、柔らかな風が全身を撫でるように吹き抜ける草原だった。

（えーと、どうしてこんなことになったんだっけ？）

我が身に起こった事態が想像の埒外で、理解が追いつかずに呆然とするナデイ。

それは彼女とともに来たレオノールやヴァレリーも同様で、まったく同じように呆然としている。だが、いつまでも哑然としているわけにはいかないのも事実。

とりあえずナデイは、現状を把握するべく自身のこれまでを振り返ることにした。

現在ナデイがいる場所は、『結晶鋼道』という階層型の迷宮だ。

鉦山が迷宮と化した『結晶鋼道』に挑む冒険者は、入り組んだ迷路のような坑道を進むことになる。

なぜそんなところに潜行したのか。

妹分であるレオノールと幸せに暮らすための家を建てるべく、材料を集めに来たからだ。

妹分という言葉どおり、レオノールはナディの実の妹ではない。ナディが五歳のとき、当時の住処だった貧民街の廃屋前で息絶えようとしていた女性から、生後間もないところを引き取ったのである。

貧民街で生活する五歳の少女が、生後間もない赤子を引き取って育てられるのか。間違いなく不可能だ。

しかし、ナディには、その不可能を可能にする力があつた。

なんと彼女は四度もの転生を果たしており、今にも死にそうな孤児に転生して記憶を取り戻した今が、五回目の人生だったのである。

一回目は、別の世界からの転移者。

二回目は、災厄竜を屠った赤金髪の魔物狩り。

三回目は、女魔法使いにして薬師――本人は薬師が本業だと言い張っていたが、ともかく。

四回目は、『不滅の魔王』を単独撃破し、最終的にはその魔王に見初められて妃となった冒険者。ナディは、それらの人生におけるすべての記憶と技術を身につけていた。

まさしく強くてニューゲームである。

そうして一緒に暮らし始めたナディとレオノール。隣人の助けもあり成長した彼女は、レオノールとより安定した生活を送るため、冒険者になることを決意する。

冒険者登録可能な十二歳になり、晴れて冒険者となったナディは次々と依頼をこなした。自身の実力が、一般的には規格外と呼ばれるほどのものであることなどお構いなしに。

ナディは現在の主流である魔術ではなく、ヒト種の間では失われて久しいとされている魔法――【逸失魔法】を使えた。そんな彼女の教育を受けた、レオノールも同様である。

二人の規格外の活躍ぶりは、冒険者ギルドのガチムチなマスター……シウルヴェステルを悩ましていた。

そうして暮らすこと五年。ナディはとあるきつかけから、妹分のレオノールが前世で早世した実の娘の転生体であることを知る。

ついでに前世も今世も多分その前の人生においても、ナディがわりとうっかりさんであつたとも判明したが、それはともかく。

今世こそ二人で幸せになるため、ナディはまず「裏庭には二羽、庭には二羽のニワトリを飼える家」を建てようと計画した。

なぜニワトリなのか。特に深い意味はない。完全にナディの趣味だ。

そうして建材を求めて『結晶鋼道』へ潜行した二人は、調子に乗ってどんどん奥へ進んだ。実は迷宮が氾濫していたことなど、まったく気付かずに。

『結晶鋼道』のその時点での最深層……四十二階層までやってきたナディたちは、ボスである女王

アリ——セレストアント・クイーン率いるアリの大群と対峙する。

無数に湧く魔物、その数の暴力に追い詰められて絶体絶命に陥ったとき、彼女たちと同じく迷宮氾濫に気付かず潜行していた黒衣の男……ヴァレリーに助けられた。

彼の能力は凄まじく、フロアを埋め尽くすほど湧くア리를【剣の墓標】であつという間に殲滅させた。

【剣の墓標】は『不滅の魔王』の十八番だった固有魔法だ。

そう、ヴァレリーは前世のナデイの夫であった、魔王ヴァレリアの生まれ変わりだったのだ。

前世と同じように熱烈に、場所を弁えずに求愛するヴァレリーに戸惑うナデイ。

お互いの状況を確認し合った二人は、ひとまずそんなことをしている場合ではないと話をまとめ、レオノールとともに未踏の四十三階層に進むことにした。

そして冒頭に戻る。

(……なんていうか、思い返すとわりと濃い生活を送っているわね)

しみじみと感慨に耽るナデイであった。

(私はただ、家を建てて裏庭と庭に二羽ずつニワトリを飼いたいだけなのに！)

目標は変わらないが、早くしないと目的がずれそうだ。

ともかく。

地平線のはるか彼方まで続く草原を目の当たりにして、しばし呆然とした三人がまずしたこと。

「とりあえず、お腹空いたから何か食べよう」
それは、空腹を満たすことであつた。

「お姉ちゃんに賛成。『結晶鋼道』で食材はたくさん拾ったから困らない」

「わあ、アデリー……じゃない、ナデイの手料理は久しぶりだ。楽しみだなあ」
わけの分からない状況に放り出されて、慌てるほど繊細な三人ではない。脅威が迫っていないと判断したからこそ、これほどのんびりできるのだらう。

数々の修羅場をくぐってきた、元魔王と元魔王妃ともあろう者が、見知らぬ場所にやってきてしまった程度で慌てるはずがない。

残るは経験が浅いレオノールだが、落ち着き払っている前世の両親を見てまだ慌てる時間じゃないと判断したのか、こちらも落ち着いている。

ただ、彼女は念のため空に向けて魔弾を数発打ち上げて様子を見ていた。

ヴァレリーは魔弾の行方を感慨深げに見つめて、首を傾げたり頷いたりしている。

ナデイはというと。

「煉瓦生成」【道具生成】

魔法で煉瓦を生成して竈を作り、ついでミスリル鉱石で鍋や調理道具、食器を作り出した。なぜ貴重なミスリルを使ったのか。

理由は単純で手元に銀がなかったからだ。ミスリルはカテゴリーとして銀に属するため、ナデイはなんの考えもなく「銀食器がいいなあ」と判断して加工した。

この場にガチムチなギルマスことシュルヴェステルがいたら、確実に怒られていただろう。相変わらず、世間一般の常識から相当外れている。

クリンネス　「【清浄】【水生成】【常設炎】……」

魔法で鍋を洗い、水を張って火にかける。

少し思案した彼女は、【収納】からドロップ品である金色のサケ……ゴールドトラウトを取り出した。

「ヴァル、これさばいて。あなた好きでしょ」

魔王妃時代の記憶に残る魔王の好物をすすめる。ツンツンしつつもそういう気遣いをするところが、元魔王様のハートを鷲掴みしているのに気付いていない。

そんなナディにいつも何度でもズキュウウン！　しちゃう元魔王様のヴァレリーは、満面の笑みを浮かべた。

「ああ、もちろんアデリーが——じゃないナディが大好きだよ」

「聞いているのは食べ物好みなんだけど？」

見当違いな発言をしてナディを呆れさせる。ある意味で特異な才能だ。

「はは、冗談だよ」

そう言い、爽やかな笑顔を見せるヴァレリー。

そんな彼をナディは、「絶対に嘘だろう」と言わんばかりのジト目で見える。ちよつとした仕草が魔王様の性癖に直撃するのに、やっぱり気付いていない。

ツツコミどころが難しい会話をしている二人を見て、ちよつと嬉しそうなのはレオノールだ。元娘として、かつての両親の仲がいい姿に満足する。現妹分としては少々複雑な心境だけど。

「今生の私は、あんたと恋仲になるつもりはないし、なりたくもないわよ。初対面なのにいきなり抱きついてくる変態に、どうやったらそんな気持ちが生ええると思ってるのよ」

「……ああ……相変わらずつれないね、ナディ。そんなキミを心から愛しているよ」

ナディのすげない態度をまったく意に介さず、飄々とそんな言葉を吐いては盛大にドン引きされるヴァレリーである。元魔王なのに別の意味で勇者だった。

「相変わらずTPO全無視なお父様。そんな様子だからお母様がデレられなかったと分かっている。さすまお」

「そんなに褒められると嬉しいじゃないか」

レオノールがため息をついて反省を促すが、理解を得られなかった。ヴァレリーはものすごくいい笑みを浮かべている。

「それと、レオ。今生のボクことは、兄と呼んで構わないよ。十中八九、キミはボクの継母だったレオノール様の娘……つまり、ボクの腹違いの妹で間違いないだろう？」

「違います。勘違いです。他人の空似です気のせいです」

確信をもって問うたヴァレリーに、即座に否定を返すレオノールである。

十中八九どころか、彼が言うレオノールとは間違はなくレオノールの母親だ。

ヴァレリーの生家——ファルギーエル侯爵家に嫁ぐも、恋敵たちの策略によって命を落とした母。

十二年前に護衛とはぐれながら重傷を負って貧民街に辿り着き、当時五歳で前世の記憶を取り戻したばかりのナディに自分を託したその人。

しかし、そう認めてしまえばファルギエル侯爵家に連れ戻され、ナディと離れ離れになってしまうかもしれない。それは嫌だ。

「ボクは十一年前——五歳のときに【魂の継承】を起こして魔王の能力を覚醒させたんだ。種族としての覚醒は十全ではないけど、能力はおおむねヴァレリアだったときと同じだよ。だから分かる。レオはクソ親父とレオノル様の血を引く子だって」

レオノールの否定に頷いたヴァレリーだが、それでも続けた。

彼の中で、レオノールが腹違いの妹であることはすでに確定しているのだろう。

「……もしその推察が事実だとしたら、あんたはどうするの。レオを連れて家に戻るつもり？」

冷え切った表情でナディが言う。レオノールがわずかに肩を震わせた。

果たして、ヴァレリーの返答は——

「好きにすればいいんじゃないかな」

どうしてそんなことを聞くのかと言わんばかりに、首を傾げている。

これにはさすがのナディも啞然とした。

「クソ親父がどうしたいかは知らないしどうでもいいけど、ボクとしてはレオノル様の顛末を知れて、おまけに可愛い妹がいたという事実が分かっただけで満足だ。しかも、それが前世で早世した娘の生まれ変わりなのだから、これほど嬉しいことはないよ」

「え、あれ？ 思ってた反応と違う。てつきり、家に連れ戻すのかと思ってたわ」

「クソ親父はともかく、ボクたちきようだい……ああ、ボクは兄が二人と姉が一人いるんだけど、そんなことはしない。レオの実力を知った戦闘狂なバカ兄が『手合わせしたい』とか妄言を吐くかもしれないけど。それと、礼節を重んじるフロランス姉上は一度家に招きたがると思う。でもよほどのことがない限り、自由にすればいいよ」

なんの問題もないとばかりに、ヴァレリーが答える。懐が広いというか、度量が大きい。

（そういうえは昔からそうだったなあ。事務作業は一切できなかったし、変態だったけど、確かに王の器だった）

ナディは前世を回顧する。なお、ヴァレリーは前世も今世も変態扱いだ。

「それなら問題なさそうね。じゃあ、食事の用意をしましょう。ほらヴァル、早くゴールドトラウトをさばいてよ」

「その提案はすごく魅力的だよ。でも残念ながら、ボクは武器はおろか包丁すら扱えない身体なんだ」

今生におけるヴァレリーの二つ名は『武器碎き』。刃物をはじめとするあらゆる武器が、彼から漏れ出る魔力に耐え切れずに自壊してしまうがゆえに付いた二つ名である。

「知らないわよそんなこと。これを貸してあげるから、早くしなさいよ」

ナディが付与でバフをマシマシにした短刀を包丁代わりに渡す。

ヴァレリーは、「ナディの持ち物を壊すのは忍びない」とブツブツ言っているが、

半眼でジトツと見つめる彼女に促されてサケに手を伸ばした。

そこでナディは気付く。

「あ。ごめんなさい、ヴァル。その短刀、【専用化】を付与したから、私とレオしか使えな——」
「すごいよ、ナディ！ この短刀はボクが使っても壊れない。ボクから漏れ出る魔力に耐えられているよ」

ところが、短刀は壊れもせずに抜群の切れ味を見せていた。手に馴染むように思いどおり扱えている様子だ。

「……え？ そう、なんだ。おつかしいなあ。確かに付与したと思ったんだけど……」

「あれ？ この短刀には本当に【専用化】が付与されているね」

「あ、うん。だから使用者が限定されていて、私とレオしか使えないはずんだけど……おつかしいなあ」

不可解な現象に首を傾げつつ、あとで魔法付与設定の確認をしようと思うナディだった。

それを尻目に、ヴァレリーは左手で持った短刀で丁寧にサケをさばっていく。躊躇など一切ない、職人並みの見事な腕前である。

「短刀を使えるのも驚きだけど……、あなた、貴族に生まれたくせにさばくの上手ね。多少下手でも許容範囲だと思ってやらせたのに」

真剣な表情で作業するヴァレリーに感心しながら、ナディは意外と早く煮立った鍋を見てわずかに首を傾げた。

「ふふ。何を言っているんだい、ナディ」

ヴァレリーは柔らかな微笑みを浮かべると、額を腕で拭い……

「愛の力だよ」

イケボで囁くようにそう言った。ちなみに、汗はまったくかいていない。

「付与の不具合だと思うけど？」

案の定、即座に反論されている。

イケボにちよつとキュンとしちゃったが、知らん顔を貫くナディであった。

一尾まるごとさばき、達成感で爽やかに額を拭うヴァレリーを見なかったことにし、ナディはアラを使って出汁を取った。

それを濾したスープに、【収納】に入れておいた下拵え済みの根菜を数種類加える。さらに、ヴァレリーから提供された葉物野菜も適度に切って投入し、煮込み始めた。

その隣では、レオノールがサラダを用意していた。ゴールドトラウトの白身部分を刺身にし、野菜と和えてドレッシングで仕上げている。

ヴァレリーもメイン料理の調理を進めていく。彼は中トロから大トロ部分に塩胡椒を振ると、表面を焼き色がつく程度に焼いてバジルソースをかけた。なかなかの手並みだ。

（そういえば、前世では私と一緒に料理していたわね）

なんとなく過去を懐かしむナディであった。口元がちよつとニヨニヨしてしまったのは、調理が上手にできたからだろう。

「……ところであんた、どうしてこんなに生野菜を持つてるのよ。菜食主義者だったわけ？」
当然とばかりに【収納】から新鮮な野菜をひよいひよい取り出していたヴァレリーに、ナデイがそう尋ねる。

すると彼はちよつと困った顔をした。

「ボクが外出するときには、いつもいつも従僕のギヤスパルが付きまどつてくるんだ。彼が消耗品や食料を用意してくれるんだけど……なぜか回復薬や保存食の類は一切なくて、生肉や鮮魚、生野菜とかの生鮮食品ばかりを買ってくるんだよ。なんか、ボクにはそれで十分だって言つて」

「……あー。あんた、魔王の頃から状態異常には絶対かからないしねー」

「まあね」

魔王の特殊能力ゆえか、能力を覚醒させた今の彼も状態異常にはならないらしい。

前世で起きたヒト種連合と魔族との戦争では、毒殺などの搦手で魔王暗殺を狙った者たちもいたが、ことごとく失敗していた。

それを見て「ぶくす」と笑つたことを思い出し、ナデイはまたしても一人でニヨニヨする。

「そもそも迷宮に潜行しているときつて、セーフエリアじゃない限り調理なんてほぼできないよねあいつ、全然分かつていないんだよ」

出立前に、手のひらを下向きにして挙手敬礼しながら「いつてらつしやまつせ！」とおかしなトーンで送り出してきた従僕を思い起こし、ヴァレリーは苦笑する。陸上なのに、なぜ海軍式の敬礼をしたのか。

「じゃあ、今まで迷宮に潜つたときはどうしていたの？」

なんだかちよつと可哀想に思えてきたナデイが聞くと、彼は遠く蒼穹を見上げる。

「生野菜を齧つてたよ……」

「そう……あなたも大変だったのね……」

美味しいものを作つてあげようと思うナデイであつた。

そうして完成したサーモンのムニエル、バジルソースがけ、や、スープやサラダを摘みつつ、ナデイは【収納】から白パンを出して二人に配つた。

このパンは現在利用している、冒険者ギルドの社宅を兼ねた宿の朝食ジュッフェの残りである。足が早いために廃棄されるぶんをもらつておいたのだ。

本来ならば衛生面の問題で食品の譲渡は禁止されているのだが……、厨房スタッフがナデイとレオノールの境遇に同情したのと、所持するマジックバッグが時間停止機能付きの高性能な品だったため、特別に許可されたのである。

なお、その他の理由として、総料理長（独身）が数年前、まだ七歳だった頃のレオノールから「料理長ありがとつ」と笑顔で食事のお礼を言われ、キュン死しそうになったことも挙げられる。

現在、彼がかぶるトックの裏面には『可愛い正義』と刺繍されているとかいないとか。

こうして、ピクニックよろしく食事を楽しむ三人。ナデイは自分が作つたスープを飲み、首を傾げた。

やがてそれぞれの空腹が満たされた頃、草原で気持ちよく昼寝をしたい欲求に駆られながら、ナディは現在の状況に関する相談を始めた。

「こつて、いったいどこなんだろうね。私たち、確か迷宮にいたわよね」

やはり疲労には勝てず、食器をそのままに地面にひっくり返る。柔らかな草が身体を包むクツシヨンのようで気持ちいい。

「そう。レオたちは迷宮にいた。でも階層門をくぐった途端にここに来た」

「考えられるのは強制転移だけど、おかしいんだよ。転移特有の魔力の流れを感じなかった」

魔王は常に強力な魔力を身にまとっている。それによって、より鋭敏に周囲の魔力の動きや指向性を把握するのだ。

その力は、ヴァレリーがヒト種に生まれ変わった今も変わらないらしい。

（まあ、魔力の流れをごまかす方法はいくらでもあるんだけどね。説明すると長いし、黙ってよ）
「なるほど」と神妙に頷きながら、そんなことを考えるナディである。例によってヴァレリーは氣付いていない。

「断定はできないけど、ここは『結晶鋼道』の階層ということかしら。それにしても気持ちいいなー。疲れているからこのまま寝ちゃいそうだよ」

横になったまま空を見上げ、真剣な表情で不真面目なことを言う。

「うん。可能性としてはあると思うね」

そう言いながら、さりげなくナディに添い寝しようとするヴァレリー。身の危険を感じたナディ

はコロコロ転がって距離を取り、大の字になって思案した。

露骨に避けられて落ち込み、膝を抱えている元魔王については気にしない。

ナディは知らないことだが、社交界でのヴァレリーは「無表情でクールな美丈夫だ」と評判だ。

そんな彼にこうした意外な一面があるのだと貴族令嬢たちが知ってしまったら、きっと落胆することだろう。ギャップ萌えに目覚める可能性のほうが高いかもしれないが。

「でも謎。上空に魔弾を撃ってみたけど天井にぶつからなかった。ダンジョンだったら領域型でも必ずあるはずなのに。それに大気中の魔力が希薄。レオはお姉ちゃんのスープがちよっとぬるかったことも気になっている」

まだ鍋に残っているスープをミスリル製のスプーンですくい、思案顔になるレオノール。非常に大人びた表情だが、まだわずか十二歳である。

前世込みだと二十八歳になるのだが、それを言ったらナディやヴァレリーは数えたくなくらいの年寄りだ。

「そうだね。レオが撃った魔弾は上空五百メートルくらいにまで到達していた。領域型ダンジョンの天井は高くても百メートル弱しかない。『結晶鋼道』のような階層型の迷宮の天井は、それより低くなるはずだから……レオの言うとおり、大気の魔力濃度も低いし、ここはダンジョンではないのかもね。ギミックって可能性もあるけど、これほど大規模なものは例がない」

ナディに避けられて落ち込みながらも、ヴァレリーはそう分析する。冷静な指摘と格好が一致していないが、それを気にする者は誰もいない。

「基本的に、ダンジョン内では魔力濃度が外より絶対に高くなるからね。この濃度はそうだな……おおむね、グランツ王国の半分以下かな」

膝を抱えたヴァレリーが、ナディに寂しそうな視線を向けてそう続ける。

そんな目を向けられても、身の危険を感じたナディがほだされることはない。

「……グランツ王国、か……」

彼女は足を振り上げて勢いをつけると、上半身を起こした。顎に手を当てて思索する。

そして顔を上げると、真剣な表情でレオノールとヴァレリーを見つめて口を開いた。

「どこ、それ」

「……お姉ちゃん……」

「……ナディ……まあ、うん、昔から細かいことは一切気にしなかったから、いいと言えいいんだけだね」

さすがにそれはないと非難された。ナディにとっては不本意な反応である。

「え？　なんで？　生きていくのに地名や国名を覚える必要がある？」

ある意味では真理を突いているのかもしれないが、一般的な社会生活を送るためには必要だ。

「お姉ちゃん。もしかしてだけどレオたちが住んでいる国や冒険者ギルドの所在地も知らないの」

「うん、知らない。どこにも書いてないし、教わった気がするけど忘れたわ」

「お姉ちゃんはやっぱアデライドお母様だった」

「そうだね。ちっちゃいことは気にしないといいながら、わりと大きなことも気にしていなかった

からね」

二人から言われているが、そんなのどうでもいいよね？　とばかりに気にしないナディであった。

よくも悪くも相当図太い。知識の偏りがハンパなく、一般常識に乏しいのは前世からだった。

「そんなちっちゃいことなんて気にしないわよ。ぶっちゃけ、普通に生きて生活するのに、国の場所なんてどーでもいいでしょ。気にするのは権力者とか政治家だけよ」

魔王妃時代、各国との折衝で散々いやな思いをさせていただいた経験があるからか、ナディの評価は低かった。

実際はそういう権力者ばかりだけではないのだが、いるところにはいるのも事実であるため反論しづらい、そんな現お貴族様なヴァレリーである。

もっとも、彼はナディが大好きで何があっても全肯定すると決めているので、思うだけに留めていた。

「そんな些事より、もっと大変なことに気付いたわ」

四つ這いでノソノソと竈に近づいたナディが、真剣な表情で鍋を覗き、レオノールたちに視線を向けて言う。

それに何を感じたのか、同じく鍋を覗き込んで次の言葉を待つ二人。

果たして、ナディが気付いた大変なこととは……

「ちゃんと煮立たせたのに、レオの言うとおりスープがぬるい」

「そっちのほうはどうでもいいのでは？」とツツコまれそうではある。

だが、この指摘が何を意味するのか、察しのいい二人はすぐに気付いた。
 「ふむ……そういえばちよつと呼吸がしづらい気がする。もしかして、ここつて標高が高いのかな」

「水の沸点が大体八七度。よつてこの場所の標高は四千百メートル以上だと思われる」

「おお、即座にそこまで分析できるのはさすがだ。それでこそボクの娘で妹。愛しているよ、レオ」

「なんかくすぐつたいから止めて」

愛しているなんて言われ慣れていないレオノールが、居心地悪くそう返す。

「照れなくていいんだよ、レオ」

しかし効果があるはずもなく、ヴァレリーのメンタルタフネスがとんでもないと証明されただけであった。

「んー……調べてみるか【飛行】」

二人の様子を見ていたナディは、言うが早いか、飛行魔法で垂直に飛び立った。

【魔法範囲極大化】【望遠視】【広角視】【敵性感知】【探知】【鑑定】

あつという間に上空三百メートルほどの高さまで舞い上がり、魔法効果を極大化させたうえで自身の視覚に望遠と広角視を付与。地上の状況を調べていく。

普段であつたなら、それはなんてことないいつもどおりの魔法の行使のはずだった。

「あ、やば……」



だが、現在のナディは、本人が自覚している以上に消耗していた。また、この場の魔力濃度が低く、外部魔力の利用が難しいことも災いした。

結果、彼女は唐突な魔力切れを起こした。

魔法の効果が消失した瞬間、ナディは真つ逆さまに落下し始める。上空三百メートルからろくな強化もせずに地上にぶつかれば、間違いなく命を落とすだろう。

その光景を目の当たりにして、言葉を失って固まるレオノール。

一方のヴァレリーは真剣な表情でナディを見上げ、両手を掲げた。

「柔らかな領域」

呟くヴァレリーに応じるように周囲の影が蠢き、上空に影の塊を生成する。こうしてできた影のクッションは落下するナディの身体を柔らかく受け止めて、落下の勢いを相殺した。

そのまま影を突き抜けたナディは、ヴァレリーの腕の中に納まる。

「えっ？ あ、りがとう」

予想外の出来事にちよつと驚いていたナディは、安堵した様子のヴァレリーを見上げて礼を言った。

だがすつぽりと、それが当たり前であるかのように姫抱っこされている状況に気恥ずかしさを感じたらしい。

「いやあ、さつき神装魔法使ったばかりなの忘れてたわ。失敗失敗。自分で思っているより消耗していたなー。あとこつて魔力が薄いから、自前の魔力を使うしかないんだよねー。探索範囲を広

げすぎてちよつと枯渇したわ」

目を泳がせたナディが、早口で言う。だが、さすがにそれで不調をごまかせるはずがない。

半眼で見下ろしていたヴァレリーは、ため息をついてから彼女を地面に下ろした。

魔力が枯渇して疲労困憊だったせいで、ナディはその場に座り込んでしまう。

「お姉ちゃん無理しちゃダメ。ちゃんと慎重に行動して」

ナディの腕を掴んで立ち上がらせながら、俯きがちのレオノールが呟くように注意した。いつもは人形のような無表情なのに、今はちよつと泣きそうな顔をしている。

「うん、心配かけてごめんね。確かにうっかりしてたわ。次はちゃんと気を付けるから、そんな顔しないで」

レオノールの頭を撫でながら、ナディは猛省した。

すると、そんな彼女の背後から、突然ヴァレリーが抱きついてきた。

「ちよ！ いきなり何する——」

「魔力移譲」【完全回復】【体調維持】

ヴァレリーと密着した箇所から、温かな魔力が注ぎ込まれる。

それが徐々にナディの身体を満たしていく中、ついで発動した回復と状態維持魔法が疲れた身を癒やし始めた。

「無理をしちゃダメだよ、ナディ。キミの命はキミだけのものじゃないんだ。それにキミに何かあったら、レオもボクも悲しい気持ちになるのを忘れないでほしい」

ナディの肩に頭を乗せ、耳元で囁くように諭すヴァレリー。当然、イケボだ。

「あ、えーと……うん。分かったから、私が悪かったから離してほしいんだけど……ほら、レオも見てるし……」

耳元で囁かれ、ナディが恥ずかしそうに身をよじらせる。

助けを求めてレオノールを見るが……

「お空がとっても綺麗。明日もきつと晴れ」

空気を讀んだ彼女は知らん顔をして、あらぬ方向を向いていた。

思わずサムズアップするヴァレリーである。

だが、それに鋭く気付いたナディは、普段の勝気さを取り戻した。

「いつまで抱きつくのよ！ いい加減に離れなさいよまったく！ 知らん顔するレオにサムズアップしてたの、見えてたからね！」

「えー、もうちよつと……」

「『えー』じゃなくて！ いいから離れなさいってば、いつまでハグしてるつもり!?」

「できればずっと……」

ナディはずっと抱きついていているヴァレリーの腕を掴み、前に倒れるよう重心を移動させる。

そして前屈みになりながら己の左足でヴァレリーの右足を内側から跳ね上げ、一気に投げた。

いわゆる内股という投げ技である。

わけが分からないまま投げ飛ばされたヴァレリーは、背中から地面に落ちた。初めて体験した投

げ技に目をキラキラさせる。

「え……なんだい今の技？ 重心移動だけで投げられたような気がしたけど。見たこともないよ、どこの流派？」

「天神真楊流」

「天神真楊流——ただの柔道の技よ。言っておくけど、私はこれしか知らないからね。他の技を聞き出そうとしても無駄よ」

どうせ理解できるはずもないだろうと、ナディは適当に答えた。

最初の人生で地球にいた頃に身につけた技術だから、異世界出身のヴァレリーに馴染みがないのは当然だ。そもそもこちらの世界には、投げ技を専門にした武術なんてない。

「ああ、ナディ。やっぱりキミは最高だ。いつでもどこでもどんなときも、ボクの想像をはるかに超える。そんなキミに、無限の愛を捧げよう」

そう言いながら両手を広げ、じりじりと近づくヴァレリーを牽制し、ナディもまたじりじりと距離を取った。双方の温度差がひどい。

傍から見るとじゃれ合いのような二人のやりとりを尻目に、レオノールは鍋に蓋をし、スープを温め直す。

「今日も平和」

そうして、元両親の痴話喧嘩が終わるのを待つことにした。

さて、空を飛んだナディはいくつかの情報を掴んだ。

まず、この草原は現在地から南北に十キロメートル、東西に二十キロメートル程度続いているというところ。

草原の果ては四方とも崖で、はるか下方には樹海が広がっている。その面積は目測不可能であったこと。

そして最後に。崖下に広がる樹海の南側にバカデカイ巨木が見えたが、知的生活を営む種族の生活圏は確認できなかった、ということであつた。

「つまり、ここはどこかの山頂なんだね。そこが平原になっているなんて珍しい」

「どうりで空気が薄い。このままじゃお湯がきちんと沸かなくて美味しいご飯が作れない。それはとても大変」

物珍しげに周囲を見渡してヴァレリーが感想を述べ、真理を突いているがちよっとズレた危機感を抱くレオノール。

きつとこの場に某ガチムチなギルマスがいたらツツコミを入れていただろうが、残念ながら彼は不在である。

「とりあえず、軽く探索してみようかな。安全を確認しないと安心して休めないし」

ちよつと落ち着いたナディが、魔法で食器を綺麗に片付ける。ちなみに、これも【逸失魔法】であり、バレたらいろいろ大騒ぎされる技術なのだが、三人はまったく気付いていない。

そんな常識外れなナディたちではあるが、探索に関しては定石どおり情報収集から開始――

【魔法範囲極大化】【望遠視】【広角視】【敵性感知】【探知】【鑑定】。……敵性存在は探知され

ないわね。でも、東側にちよつとした岩山……？ 空間が歪んでいるように見える場所があつて、そこに何か生物？ 無機物？ とにかくそんなのがあるわよ」

――したものの、一応セオリーに則つていて、でも常識からかなり外れた魔法で片を付けてしまった。曖昧な報告をしながら、常識なんか知ったこっちゃないと気にしていないナディである。

マジなサバイバルとなれば、油断は死に直結する。外聞を気にしてなんていられない。

よつて、ナディは本格的に本気を出した。

とはいえ、目測や探知魔法では現地の詳細な状況は分からない。

相談の末、三人はまず東の果てを目指すことにした。

それでも現地点から直線で十キロメートルはある距離だ。外部魔力の利用が不可能であるため、一行は魔法消費を極力抑えつつ、徒歩で移動を開始する。

ところが……

「お姉ちゃんごめんなさい。レオが小さいせいで足を引っ張っちゃってる」

まだ幼いレオノールの体力が早々に尽きてしまい、ヴァレリーに背負われての移動となった。

本人は申し訳なさそうにしているが、こればかりはレオノールが悪いわけではない。

ナディもヴァレリーも彼女が謝るたびに気にしないよう伝えているのだが、それでも気になってしまうのは仕方ないだろう。

もつともナディたちは、レオノールに頼られて悪い気分はしていない。

「そんなに気にしないでいいのよ。というか、レオはもつと私を頼つていいの。赤ちゃんの頃から

ずつと手がからなすぎて、お姉ちゃんは逆に心配だわ」

「ああ、レオをまたおんぶできるなんて夢のようだ。なんなら、これからの移動はずっとこのまま
で全然構わないよ。むしろこのままがいい」

親バカ全開で世話をしたがる二人である。

レオノールはかつての第一子であり、早世した娘の生まれ変わりだ。
甘くなるのは当然で、誰でもそうなるだろう。

「レオは早く大きくなりたい。そしてお姉ちゃんの役に立ちたい」

ヴァレリーの背で拳をギュッと握り締め、レオノールが呟く。背負っているヴァレリーはもちろ
ん、隣にいるナディにもぼつちり聞こえた。

その言葉に、二人の反応はというと……

「ウチの子、ヤバいくらい可愛いんだけど！ え、何？ レオってば天使みたい。いや違う、まさ
しく天使そのものだよ！」

「何を言ってるんだい、ナディ。レオが天使だっていうのは当然でしょ。いや、もはや女神かも知
れない。ああ、どうしてウチの娘はこんなに可愛いんだ！」

親バカっぷりが炸裂しまくっていて、レオノールはさすがにちよつと引いた。

まあ、元両親にこれほど愛されているのは単純に嬉しいわけで。ヴァレリーの背に顔をうずめて
ニンマリしていたのは、二人には言えない秘密である。

そんな親子のコミュニケーションを取りながら、ナディたちは気になった東の岩山？ を目指す。

景色が変わらない場所を延々と移動するのはストレスが溜まるため、目標地点を据えて移動した
ほうが精神的に楽なのだ。

もともと、三人は同じ場所を延々と歩かされたくらいで疲弊するほどヤワではないが。

移動すること約二時間。一行はナディが魔法で発見した岩山らしき場所に到着した。

遠目には岩山に見えていた地点だが、間近に迫ってみると明らかに違う。

岩肌を構成する鉱物は透明度が高く、透過する光を屈折させている。

こうした光の屈折のせいで、空間が歪んでいるかのように見えていたらしい。

そう。それは天然の光歪曲迷彩となった、巨大な水晶の塊であったのだ。

透き通る水晶がそそり立つ様を目の当たりにして、さすがに言葉を失うナディたち。

だが、そこから湧き出る魔物の群れを見て、さらに言葉を失った。

「お姉ちゃん。こんなに絶景なのにどうして絶望が湧いて出るの。レオがっかり」

「ああ、うん。そうね。それはそう。まあでも、アレを見て大騒ぎするほど私もレオも恵まれた環
境じゃなかったし。遠慮なく殲滅できるわね」

「うん。ボクも大騒ぎはしないな。だけど、なんでわざわざ水晶の外殻を持っているんだろうね」

レオノール、ナディ、ヴァレリーはそれぞれそんなことを言い、特大のため息をつく。

美しい巨大水晶。その陰から湧いて出てきたのは、同じく透き通るほど綺麗な水晶の外殻を持つ、
無数のゴキブリであった。

なお、正式名称はクオーツ・ローチという。近親種に美しい緑色のエメラルド・ローチ、目が覚めるような青色のサファイア・ローチ、燃える炎のごとき赤色のルビー・ローチ、無色透明だが光を複雑に乱反射しさらに高硬度なアダマス・ローチなどがある。

目の前に現れたクオーツ・ローチをはじめ、どれも全部体長二メートル超えの魔物だ。

砕いて適切な大きさにカッティングすれば、貴婦人がこぞって買い求める貴金属の素材になる。原料がゴキブリなのは秘密だが。

「ねえ。あんた、【剣の墓標】で一掃できるっ？」

【収納】から自前の小太刀——『凍花』と『灼花』を出して逆手に持ちながら、ナディはヴァレリーに聞いた。彼がわずかに思案し、頭を振る。

「迷宮内では外部魔力があつたからいけたけど……この場の薄い魔力じゃあ、自前を使わなくちゃならないから厳しいかな。ボクの愛剣があれば話は別だけどね」

「愛剣？『グルーム・プリンガー』のこと？」

「そう。さすがに【魂の継承】で前世の能力を覚醒させたとはいえ、魔王の頃の持ち武器まで継承するのは無理だったな。ああ、もう二度と逢えないんだろうなあ……でも、アデリーとともにあると思うと溜飲も下がるよ」

遠い目をするヴァレリーの横で、ナディが【収納】を漁る。

「アレがないとボクは本気が出せないんだよ。何しろボクの半身とも言うべき剣だからね。実際は剣の形をした杖なんだけど」

「それならあるわよ、ほら。なぜか私の【収納】に入ってたから」

「でも、今生は世界を相手に戦うわけじゃないし、半身どころかボクの全部は今やナディのものだからなくても別に……って！　なんで持つてるの!？」

今日一驚く元魔王様である。いや、前世も含めて過去一驚いたかもしれない。

「知らないわよそんなこと。そもそも魔王城の宝物庫に封印したはずの『凍花』と『灼花』が【収納】にあつたことだって驚きだったし」

「レオの【収納】にもアデライド母様からもらった剣が入ってた。あれもレオ以外に使い手がいないから宝物庫に封印していたはず」

「へえ、レオのも。不思議なことがあるんだな……あ」

不可解な事象に首を傾げていたヴァレリーが、何かに思い当たったのか視線を泳がせた。その仕草は、前世で何か隠し事をしていたときの癖とそっくりだ。

ピンと来たナディは、ジトツとした視線を向けた。

「……で、釈明を聞きましょうか？」

カサカサと集まり、警戒するように様子を窺うクオーツ・ローチを尻目に、ナディは詰問した。言い逃れできないと観念したのか、ヴァレリーがため息をつく。

「実は、あれがそうなって……」

「え？　何がどうなったの？」

「だから、こうなって……ねえ？」

「んん？ 何を言ってるのよ」

「それで、あぁなって……」

「は？ ちょっと待ってよ」

「……というわけなんだよ」

「分かるか！ どういうわけなのよ、全っ然分からないわよ！」

ごまかすつもりなのか、はたまたよほど説明が難しいのか、とにかく言葉を濁すヴァレリーであつた。説明が下手どころの話ではない。

「えーと、レオの【収納】^{ストレージ}には自分の剣が入っていたんだよね？」

「そう。でもレオは入れた記憶がない」

ヴァレリーの確認に、レオノールがそう答える。ナディはなんとなく事の経緯を察してしまった。「あのね、レオ。実は前世のあなたを埋葬^{まいそう}するとき、みんなで相談して棺^{ひつぎ}の中に武器を一緒に入れたのよ」

言いづらそうに、ナディが告げる。いくら前世のこととはいえ、自分の埋葬されたときの話を聞かされるのはいい気分ではないだろうと思つたのである。

「そうなんだ。なるほど理解した。だからレオの所有物扱いされて【収納】^{ストレージ}に入っていたんだ」

ところが、当人の反応はあっさりしたものだった。あくまで前世の出来事であり、現世とは関係ないと割り切っているようだ。

（そういえば私もそうだった。前世のことはあくまで過去だし、いつまでも引きずっていてもね）

内心で独白して、ナディも思考を切り替える。

続けて、ヴァレリーへ視線を移した。

「で？ 私のほうは？」

「あ、うん。実はね、アデリーのときも棺に『凍花』と『灼花』を入れようって、子どもたちと話したんだ」

「へえ。だからレオと同じことが起きたんだ。でも……それはあんたの剣まで入っていた理由にはならないわね……って、もしかして、入れたの？ 宝物庫に嚴重に封印していたのに？」

「えーと……うん。入れた」

「なんてものを入れるのよ！ 宝物庫からなくなつたのに、まさか誰も気付かなかつたの!? どれだけ警備がザルなのよ、まったく！ そもそもあんな物騒^{ぶそう}な剣が棺に入っていたら、普通は気付くはずでしょう!? どうしてあんな禍々^{まかまか}しいのを入れたのよ!!」

「いやあ、気付かれないようにしたからね。嚴重に封印して、アデリーの亡骸^{なきがら}の背後に置いて、周囲を白と淡いピンクの花で埋め尽くしたんだ。ボクの半身はこれからもアデリーとともにありますように、という願いを込めて。それと、禍々^{まかまか}しくないよ。光沢のある漆黒^{しつこく}の十字で、刀身に楔形紋^{けつけいもんよう}様が彫金された綺麗な剣じゃないか」

「魔力が刀身を這って蠢くから禍々しく見えるのよ」

前世の夫がやらかしたことが白日の下にさらされ、頭痛がひどくなってくる。

ナディの行動のせいで、現在の彼女以上に頭痛の種を抱えているガチムチなギルマスがいるのだ

が、それは柵^{なな}上げしていた。

「あんたねえ、される身にもなってみなさいよ。ったく……」

しかし、過去のやらかしに今さら言及したところでどうにもならない。そう考えて自分を納得させたナディは、【収納】から取り出した『グルーム・プリンガー』を渡した。

片膝をついて恭しく剣を受け取り、ヴァレリーが笑みを浮かべる。

彼の笑顔を見たナディは、やっぱり魔王だなーと感慨深く頷いた。

その表情を、邪悪^{じあく}だとは思わない。どこか欲しかったものを手に入れた子どものような無邪気さがあつた。

「ああ、ああ、ナディ、ナディ！ やっぱりキミは最高だよ！ ボクはキミ以外の伴^{はんりょ}侶なんて考えられない！ 愛してる、この世の誰よりも何よりもキミを愛し、そして永遠に添^とい遂^とげよう！」

「……うわあ。なんていうか、うわあ……胃もたれするくらいに重いわあ」

左手に持った『グルーム・プリンガー』を掲げ、情熱的に宣言^{せんげん}するヴァレリー。言われたナディは盛大に引いている。

愛を語られたとて、すべての女性がキュンとするわけではないのだ。

「そういえば、なんであんたまで生まれ変わっているのよ。仮にも『不滅の魔王』だったでしょ？ 死んだって復活していたのに、おかしいじゃない」

「え、今頃？」

場違いなことを聞いて、当然の返答をされるナディだった。

だが、彼女としても、再会してすぐ抱き締められたり、見知らぬ土地に転移させられたりといったトラブルが続き、疑問を解消するタイミングを逸^よしていたという理由がある。

「不滅でも死なないわけじゃないんだ。それに、アデリーがいなくなった世界に希望を持てなかったから」

不死を殺すのは退屈と絶望だとは、よくいったものである。

それはともかく。

ナディから『グルーム・プリンガー』を受け取ったヴァレリーは、愛^{いと}おしげに刀身を撫でた。

【剣の墓標】

咄くと地面に落ちた剣の影から無数の刃が伸びる。影が落ちていない地面からも同じように伸びたそれらは、ゴキブリを残らず刺し貫いた。

ナディは、魔物を殲滅してなお、まるで子どものように無邪気な笑みを浮かべているヴァレリーは、まさしく魔王だと理解する。その姿を目の当たりにして、なぜか胸が高鳴った。

「どうしよう、レオ。私、ちよつと胸が苦しい。心不全かな」

「お姉ちゃん……」

「ヤバイなー。病気にいかつたらすぐに治すし、予防もちゃんとしているつもりだったんだけど。」

【大治癒】【持続治癒】【完全回復】【体力賦活】

「……お姉ちゃん……」

ナディはそういつた感情に疎^そい。転生を繰り返してきたこれまでの人生を振り返ってみても、四

度目以外、浮いた話は一切なかったのだから筋金入りだ。

それに魔王妃アデライドのときだって、恋とか婚約とかお見合いとかがしたかったわけではない。亡命した先の魔王に求婚され続け、根負けした結果でこうなっただけだし。

（うん。犬のご飯にもならないからとりあえず放っておこう）

そう心中で独白し、レオノールは「ひーはー」と特徴的な深呼吸するナディからそっと目をそらした。

「殲滅したよ。死骸が消えないところを見ると、やっぱりここは迷宮じゃないね」

一方、『グルーム・プリンガー』を体内に格納したヴァレリーは、一撃で屠ほった無数のクォーツ・ローチを見てそう感想を漏らした。

迷宮に棲息する魔物は、倒されると魔結晶やその他のアイテムをドロップして消えてしまう。

その報告を聞いて我に返ったナディは、無数に転がっているクォーツ・ローチを見て思考が一気に現金キャッシュになった。

「メチャクチャ高純度の水晶ね。これ、原型をなくすくらい砕いて宝石商に売りつければ一財産築けるわ。これを高値で買った貴族貴婦人どもが、もとがアレだと気付かずドヤ顔で着飾る様を想像するだけで、特大バゲットが粹すいで三本はイけるわね！」

発想が鬼畜きちくである。

ちよっとナイわーと言われそうなことを澁刺はつらつと宣のたまうナディを見て、レオノールとヴァレリーは――

「見栄全開で高級宝飾を買い漁る貴族から合法的に金銭を得る。ロクデナシの優越感を踏ふみにじる庶民しょみんの味方。さすおね」

「ああ、それは痛快だね。中身じゃなくて、見てくればかりを飾る誇り高そうなバカどもにはお似合いだ。よし、絶対に売り飛ばそう」

ものすごくいい笑顔で全肯定した。元親子で元夫婦なだけあって、息がピッタリだ。

そうして、無数に転がっているクォーツ・ローチをナディは笑いながら二刀の小太刀で切り刻んでいく。

「ああ、イイわー。水晶をゼリーみたいに簡単に切り刻める『凍花』と『灼花』はやっぱりイイわー。それに、ちよっどいい鍛錬たんでんになる」

ちよっと危ない感じで悦に入るナディ。

「久し振りの愛剣だし、ボクも勘を取り戻さないとね。……うん。この感覚、とてもいいよ」

ヴァレリーも手伝い、無数に出した影の刃でゴキブリをいろいろな大きさにカッティングした。

ちなみに、このゴキは中身も外身も全部水晶でできているため、余すところなく素材として使える。

どうやってカサカサしていたのだろうとか、精神衛生的によろしくない絵面を考えてはいけない。

「ナディ、もっと『イイわー』って言って。できれば吐息と一緒に囁くように」

「ちよっと止めてよ変態！」

少々危あぶない発言をして、ナディにやっぱり却下されていた。

しかし、ナディに冷たくされるのは嫌いじゃない、少々アレな趣味のヴァレリーだった。そうした作業を終えて、戦利品のクオート・ローチの素材を残らず回収し、三人は一休みする。その場で竈を作って軽食をとり、腹^{はら}抱えをしてからさらに先へ進んだ。

なお、メニューは焼いたロブスターにホワイトソースを和え、千切りした葉物野菜を敷き詰めたパンに挟んだサンドイッチである。アクセントとして、パンにマスタードを塗^ぬっておくのがポイントだ。

余談だが、ナディとレオノールが苦手とする焼きカニ味噌と焼きエビ味噌をヴァレリーに食べさせようとしたところ、分かりやすくいやな顔をされた。やはり家族は食の好みも似るのだろう。

そしてさらに歩くこと二時間。三人はついに草原の果てに辿り着いた。

地面が途切れ、そこから下は切り立った断崖^{だんがい}になっている。雲海^{うんかい}が広がっており、地上を見通すことさえできない。高所が苦手な方々は、ちよつと吐きかねないような景観であった。

だが、これは予想の範囲内。高所程度では心が折れない三人である。

ただ、体力が尽きていたレオノールはもちろん、迷宮での戦闘などで魔力枯渇を起こしたナディもまた疲れていた。そこで、今日の探索は打ち切って休むことにする。

もっとも魔力枯渇に関しては、誰かさんが接触行為をして譲渡^{じやうど}したため問題ない。別の意味では問題大ありだが。

幸い、食材は『結晶鋼道^{クリスタル・マイン}』でドロップした魚介が大量にあるし、この草原にも可食な野草が結構

ある。ここまでの道中でレアな薬草が生えているのを、ナディが見つけていたりもした。

徐々に陽^ひが傾^{かたむ}き、あたりが暗い紫紺^{しこん}に染まっていく。

草原に寝転がっていたナディとレオノールは、疲労のためかそのまま眠ってしまった。

その姿を愛おしそうにヴァレリーが見つめ、【収納^{スレーン}】から毛布を取り出して彼女たちにかける。

そして彼は『グルーム・ブリンガー』を抜いて地面に突き立てた。

このとき、予想よりも刀身が地面に突き刺さらないのに違和感を覚えたが、それより二人の安眠が優先だ。

【影の拠点^{シャドウベース}】

唱えると大量の影が生じ、ナディとレオノールを中心とした簡易的な影の小屋を作り出す。

「うん。まだ全盛期にはほど遠いな。でも、今はこれで十分だろう。誰と戦うわけでもなし。ボクはね、ナディ。キミと大切な妹を守ればそれでいいんだよ。あとは何も——」

いらない。そう続けようとしたがわずかに考え、気を取り直して言い直す。

「……でもナディとえっちなあ」

深いため息をつき、彼は少し離れたところで横になった。

カッコつけようとしても、結局は思春期じみた衝動が漏れ出るヴァレリーであった。

(ばーか)

微睡^{まじろ}みの中で独白を聞いていたナディは、声に出さずにそう呟く。

ナディとレオノールの長い一日は、こうして終わったのである。



時は少し遡り、ナディたち三人が、突然草原に放り出されて呆然としていた頃。

『結晶鋼道』の深層。迷宮とは切り離されたところにある場所で、巨大な魔法装置を前にした男は冷や汗をかいていた。

(危なかった……)

複雑怪奇な魔法文字が羅列している装置を操作しながら、独白する。

本日未明、自身が保護する「彼」の魔力が、今までにないほどの高まりを見せた。

これほどの反応は十二年前と十一年前以来三度目だが、今回は過去二回を上回る反応であった。(ついに目覚めるのか)

そう思った男は装置を操作し、「彼」の魔力排出を手助けした。

ところが、「彼」は目覚めなかった。何かに反応し、一時的に魔力が高まったにすぎなかったらしい。

よって魔力を「彼」に戻そうとしたが、一度出たものは戻せない。

仕方なく魔力に指向性を与え、男が管理する迷宮内——『結晶鋼道』へ放出するしかなかった。

まあ、それが原因で迷宮氾濫が起きたわけだが、それもようやく抑え込めたらしい。

男がこの地に来て、複雑怪奇な装置を発見して、五十年ではきかないほどの年月が経過していた。

それほどの時間をかけてなお、いまだにこれがどういう仕組みなのか理解できない。

だが理解はできなくとも、目的は予想できる。

この装置が接続されている先。そこには直径二メートルはある、滑らかなクリスタルガラスのような素材でできた球状の水槽があった。

水槽の中には、男が看病する「彼」——漆黒の髪を持つ魔族の青年が、己の身を抱えるようにして浮いている。

どんな構造なのか不明な水槽には、出入口もない。完全に密閉された中で、青年は保存されるかのように浮いている。

微動だにしない様子は死体じみているが、実際はそうではない。「彼」は呼吸の代わりに魔力を吸収し、また放出しているのだ。

その反応で分かる。「彼」は、明らかに生きている。

長い年月をかけて装置を観察した男は、これはきっと「彼」になんらかの治療を施すためか、もしくは「彼」を生きたまま未来へ残すためのものと結論づけた。

何より、「彼」の髪色。

魔族の多くは暗色系の髪色と、濃淡の差こそあれ金の瞳を持つ。

そんな中、魔族の王族は全員が漆黒の髪だ。今は亡き魔王ヴァレリアは、藍色の髪であつたらしいが。

装置に浮かぶ「彼」は夜闇のような漆黒の髪をしていた。

間違はなく「彼」は王族、またはそれに連なる者だ。

そう考える男もまた、暗灰色の髪と赤混じりの金色——赤金色の瞳を持つ魔族である。

強靱な身体能力と高い魔力親和性を誇る魔族。しかし男は戦闘能力に乏しく、その反面、魔力の運用や装置の開発といったことに特化していた。

男が得意とする力はどうしても、脳筋率が驚異の九割九分を占める魔族の中では評価されない。

時代が時代なら、あるいは魔王ヴァレリアの寵姫が存命であつたなら、きっと正しく評価されていたであろうが。

だから居場所を失って、男は魔族領を飛び出した。

そうして放浪しても、世の脳筋率は意外と高く、遭遇率も高い。

たちの悪いことに、脳筋は世話好きないいやつが多かった。男にとつては大迷惑であつたが。

人目を避けるようにして放浪の旅を続け、男はやがて廃坑跡にある無人の廃村に辿り着いた。

迷わず、すべてから逃げるように廃坑へ潜った。人との関わりに疲れ、知らず、死を望んでいたのかもしれない。

そう望んでいても、魔族の強靱な肉体は簡単には壊れない。

抵抗力が凄まじいためヒト種に比べれば状態異常になりづらいし、魔族特有の疾患でなければ病気にも罹思しづらい。

それに魔力さえあれば、水だけで生存可能なのだ。

魔族はチートな種族だった。

自身の種族を恨めども、彼もやはり魔族。死ぬるはずもなく、ただ廃坑を彷徨う日々が続いた。そうして廃坑に潜り、年月を忘れ去るくらいの時間を一人で過ごした果てに、ついに見つけたのだ。

「彼」が眠る魔法装置を。

発見したときにはこの魔法装置は停止寸前で、本来「彼」に供給されるべき魔力が外部に漏れ出していた。

そのせいで、人を避けるように潜った廃坑も迷宮化しかけていたらしい。

男は無作為に放出され周囲を侵食する魔力に、自身の持つ知識の限りを注ぎ込んで指向性を与えようとした。

当初はうまくいかなかった。

しかし、各地を放浪していたときにたまたま立ち寄った、ガラクタじみた謎の物品を展示している小さな民家……そこで目にしたとある覚書を思い出し、藁をも掴む思いで魔術に転用して装置の効果を上書きする。

結果的にその判断が功を奏した。完全とはいかないまでも、装置が正常稼働を始めたのである。

なお、不思議な民家の所在地は、四方を山脈に囲まれた広大な盆地の中心。農耕が主産業である辺境の村——グレンカダム。

寂れた民家を、高位の森妖精らしき男が維持・管理していたのだ。

「愛しい愛しい宵闇の空のごとく美しい髪の子へ……愛を愛を愛を——」と笑みを浮かべて言いな

がら何かを書き綴^{つづ}っている、怪^{あや}しく、危なく、気持ち悪い人物であったが。それはともかく。

装置が安定稼働し始めたことで安堵^{あんど}した男は、そこに使われている高度な技術を目の当たりにした。そして、己の知識と技術をさらに高めたいという欲求を抱いた。

すべてを諦めて死を選ぼうとしていた男が、唯一捨て切れなかった願い。

(この装置を使って、『世界』を創^{つく}てみたい)

放浪の日々は、何も辛いことばかりではなかった。脳筋との関わりは苦痛でしかなかったが、それはさておき。

旅で目にした美しいもの。楽しかったこと。嬉しかったこと。

そうしたすべてを、ここに満ちる魔力があれば創造できるのではないか。

「僕は自分の『世界』を作りたかったんだ」

何も言わない、答えない、動くことすらしない「彼」に語りかける。

「その願いが叶^{かな}った果てを、目覚めたあなたと見てみたい」

水槽に浮かぶ魔族を親愛の表情で見つめながら、男はそう呟いた。

そしてふと、思い出す。

(それにしても、あの少女たちはなんだったんだ？ ヒト種だよね？ 迷宮が氾濫しているんだよ、

普通は逃げ一択でしょ)

男は迷宮を維持・管理する装置に組み込まれている、迷宮内を把握する魔術陣に触れることで、

『結晶鋼道^{クリスタルウェイ}』の状況をつぶさに観測することができた。

そちらを一瞥^{いちべつ}し、数時間前まで嬉々^{きき}として魔物を狩^かりまくっていた少女二人組を思い起こす。

最後は、数千匹のセレストアントの大部にたつた二人で立ち向かうという無謀^{むぼう}をしかした。

当然追いつめられていたが、突然現れた黒衣の男が、氾濫で強化され数も膨大^{ぼうだい}だった魔物を瞬殺^{しゅんころ}

するという非常識をやつてのけたのである。

(いや、ありえないでしょ)

このままでは、あの三人が自分たちがいる隠し場所まで到達してしまう。

男だけであれば逃げようがあるが、もし「彼」を見つけてしまったらどうなるか。

ヒト種と魔族は、現在では確執^{かくしつ}がないとされている。だが、一部のヒト種は相変わらず魔族を廃^{はい}

絶^ぜしようと企^{たくら}んでいると聞く。

(もし、彼女たちがそうだったら……)

そう考え、決断した。

なぜか装置に最初から組み込まれていた力を使い、現在もこの繋がついている座標^{ざひょう}不明の彼方^{かなた}へと三人を追いやる。

本当は繋がり^{つながり}を断ち切りたかったのだが、どうすればそれができるのかが分からない。だから【転移門^{ポータル}】を隠し、破壊困難な迷宮の壁で塞いで道を閉ざした。

(これで、「彼」に危険が及ぶことはない)

そう考える。だが慎重^{しんちょう}というか臆病^{おくびょう}というか、彼の性質がそれで終わることを許さなかった。

「……そうだ、守護竜を創ろう」

放浪先で聞いた、赤金色のハンターと災厄級魔竜『燃え爆ぜる皇帝竜』との戦いの伝承。災厄竜に匹敵する竜種の創造は無理でも、似たものなら生み出せるはず。

男は静かに、だが激しく心を震わせて構想を固め、創造を始めた。

——家族を守るために。

二章 地平線を越えて

ヴァレリーが作り上げた【影の拠点】で目覚めたナディは、影という材質ゆえかいまだ薄暗い室内を寝ぼけ眼で見回した。

隣ではレオノールが毛布にくるまって寝息を立てている。

「はひゅふう〜」

その愛らしい寝顔を見たナディは、ちよつと言語化しにくい吐息を漏らし、だらしない笑みを浮かべた。

（ウチの妹、マジ天使！）

目覚めた直後からシスコン全開である。

レオノールを見てひとしきりクネクネしていた彼女だが、息を整えて外に出る。

小屋の外にはすでに起きていたヴァレリーがいた。

昨夜のうちに作っておいた竈に火を入れて、真剣な表情で何か調理しているようだ。

「おはよう、ヴァル。ずいぶん早いね」

背伸びをしながら声をかけ、ナディは朝靄が立ち込める草原へ目を向けて首を傾げる。

（標高が高いところって、空気が乾燥しがちだから朝靄ってそうそう出ないわよね？ 夜のうちに

雨が降ったわけでもないのに。やっぱりここって、なんかおかしいな）
そんな疑問が浮かぶ。

しかし、突然転移させられた謎の場所に一般的な気象の常識が通用するはずがないと判断し、考えるのを止めた。

そうして一人で納得しているナディに気付き、ヴァレリーがこちらを一瞥して微笑みを浮かべた。逆光で確認しにくいのが、彼はなぜかピンクのフリルをあしらったエプロンを身につけ、四角いフライパンを振っている。

今すぐにでも駆け寄りたいそうだが、調理中なので動けずにいるらしい。尾骶骨^{びていこつ}のあたりから生える尾^おが激しく振られている幻覚が見えた。

「……何を作ってるの？」

真剣な表情に興味をそそられたナディは彼に近づき、その手元を覗き込む。

ヴァレリーが作っていたもの、それは玉子焼きだった。

「アデリーが作ってくれたのを思い出してね。記憶を頼りに焼いてみたんだけど……意外と難しいね」

そりやそうだろう。

そう思うも口には出さず、ナディはどこどころ焦^こげていて形も歪^{いびつ}なそれとヴァレリーを交互に見る。

だが、記憶を頼りに多分初めて作ったにしては、なかなかの出来だ。

玉子焼きを皿に移し、手早く切り分けていくヴァレリーに言う。

「初めてなんでしょ。上出来だと思うけど」

満更でもない表情で口元を押さえる彼をよそに、ナディは屈^{かが}んで玉子焼きを摘み食いし、首を傾げる。

「あ……まあ、いいか。どうかかな？」

それに気付き、ヴァレリーが感想を求めてきた。

咀嚼^{そくかく}して呑み込んだナディは、傾げた首をそのままに彼を見上げる。まっすぐに見つめられてときめく魔王様。

「ねえ、これって入れたのは塩だけ？」

ナディは摘まんだ指を舐^なめながら聞いた。

ヴァレリーが若干戸惑いながらも答える。

「え？ そうだけど」

すると、ナディは小さくため息をついた。腰^{こし}を伸ばして立ち上がり、正面からヴァレリーを見上げる。

「さっきも言ったけど、初めて作ったにしては上出来だわ。むしろどうしてこんなに美味^{うま}いんだろうってくらい。だけどね……、玉子焼きなら味付けはお砂糖^{さとう}でしょ。分かってないわね」

魔王妃は、甘い玉子焼きをご所望だった。

なるほどと頷くヴァレリーである。だが、彼にも理由がある。